

レボノルゲストレル放出子宮内システムは乳癌のリスク上昇を伴わずに、卵巣癌・子宮体癌のリスクを減少させる -NOWAC 研究より-

Levonorgestrel-releasing intrauterine system use is associated with a decreased risk of ovarian and endometrial cancer, without increased risk of breast cancer. Results from NOWAC Study.

Jareid M et al
Gynecol Oncol 149:127-132, 2018

目的 卵巣癌の生命予後は不良であり、それを改善するのは困難である。そのため1次予防が重要である。レボノルゲストレル放出子宮内システム(levonorgestrel-releasing intrauterine system; LNG-IUS)は子宮体癌を予防し、最近の研究では卵巣癌も予防するものの、乳癌のリスクは上昇させる可能性があることが示唆されていた。われわれはLNG-IUSの使用者と未使用者においての卵巣癌、子宮体癌、乳癌の調整リスクを比較した。

方法 本研究はNorwegian Women and Cancer Studyとして住民登録されている集団(104,318人)を用いた前向き観察研究である。9,144人にLNG-IUSの使用経験があり、9,5174人がLNG-IUS非使用であった。使用の有無に関する情報は自己管理型質問票で抽出され、癌の罹患に関してはノルウェーの癌登録情報との

連結により同定された。統計解析としてポアソン回帰分析を用いて相対危険度(95%信頼区間)を計算した。

結果 合計の観察人年は1,305,435人年であり、年齢の中央値は52歳、平均追跡期間は12.5カ月(標準偏差3.7)であった。LNG-IUS使用者のうち、上皮性卵巣癌が18例、子宮体癌が15例、乳癌が297例あった。LNG-IUS使用者と非使用者を比較すると多変量相対危険度はそれぞれ卵巣癌0.53(95%CI:0.32-0.88)、子宮体癌0.22(0.13-0.40)、乳癌1.03(0.91-1.17)であった。

結論 LNG-IUSの使用者を非使用者と比較したところ、卵巣癌および子宮体癌のリスクが大幅に減少しており、乳癌のリスクは上昇しないことがわかった。

(藤田保健衛生大学産婦人科 大谷清香 抄)

体外受精における新鮮胚・凍結胚移植後の違いによる治療成績の比較

Transfer of fresh versus frozen embryos in ovulatory women.

Shi Y et al
N Engl J Med 378:126-136, 2018

背景 選択的凍結胚移植は多嚢胞性卵巣症候群(polycystic ovary; PCO)の無排卵女性において、高い生児獲得率に帰結していることが知られている。しかし、PCOを除く正常月経周期のある女性において、凍結胚移植が生児獲得率を上昇させるかどうかは不明である。

方法 この研究は多施設共同の無作為化割付試験であり、初回の体外受精を行う2,157人の女性を新鮮胚移植あるいは凍結胚移植の群へランダムに割り付けた。第一評価項目は初回胚移植後の生児獲得率とした。

結果 凍結胚のグループと新鮮胚のグループを比較した際、生児獲得率に有意差は認められなかった(48.7% vs 50.2%, 相対リスク0.97, 95%CI 0.89-1.06, p=0.50)。また着床、妊娠、流産、妊娠の継続に

ついてもグループ間で有意差は認めなかった。凍結胚移植は新鮮胚移植と比較して、卵巣過剰刺激症候群に関しては有意にリスクが低かった(0.6% vs 2.0%; 相対リスク0.32, 95%CI 0.14-0.74, p=0.005)。産科的および新生児学的なリスク、他の合併症に関しても2グループ間で有意差は認めなかった。

結論 排卵のある不妊女性において、新鮮胚移植と凍結胚移植で生児獲得率に関する有意差は認められなかった。しかし、凍結胚移植で卵巣過剰刺激症候群のリスク低下を認めた。

(藤田保健衛生大学産婦人科 大谷清香 抄)